

看護実践の可能性 —多様な人々とのつながりから—

パネラー：櫻 井 雅 代（国立がん研究センターがん対策情報センター）
山 崎 潤 子（緑が丘訪問看護ステーション）
関 谷 昇（千葉大学法政経学部）
座 長：池 崎 澄 江（千葉大学大学院看護学研究科）

1. パネラー発表内容

1) 信頼できるがん情報をわかりやすく「つなぐ」（櫻井雅代氏）

がん対策情報センターは、2006年の厚生労働省による「がん対策推進アクションプラン」の一貫で、国民・患者の視点から「正確な情報に基づく支援」と「役立つ情報の提供」を目指して設置された。昨今は、がんに関するメディアの情報が氾濫しており、特にインターネットで情報を沢山調べて、問題を整理できず不安が増大してしまう患者さんからの相談も多い。その場合、一度ネット検索を止めて一緒に考えましょう、と伝える。医療が進歩し多様な情報が発信され続けても、人を支えるのはやっぱり人だ、と考える。

相談員としては4年目になるが、相談者自らが意思決定できるよう支援することを第一としている。先入観を持たずに相手の話をよく聴き、声の調子や周囲の音にも耳をすませる。誰かに話を理解してもらえたと思うだけでも前へ進めることもある、と相談者の力を信じる。そして、主体的な意思決定は、治療や周囲との関係に「向き合う力」になると考え、ニーズに応じた情報支援を行うことに配慮している。

2) 「地域で暮らす」を支える訪問看護（山崎潤子氏）

訪問看護は在宅療養者とその家族に提供する看護サービスである。尿路感染症の例を仮想的に考えた場合、療養者に関わる職種は訪問看護師以外に10種以上にもなり得、遠方に住む家族や自治体の担当者も役割を持つ場合がある。このように考えると、訪問看護師が何かを実行するためには一人では無理で、これらの関係者の人々が同じ目標を共有することが在宅ケアには重要である。訪問看護は他職種や支える人とのつながりで、その力が発揮できると考えている。そのためには、必要なことをわかりやすく伝えるコミュニケーション技術、例えば

「何かあったら連絡してください」ではなく、具体的に伝える必要がある。また、生活の場における五感を働かせた情報収集を行うことで、療養者の能力を引き出し効果的なケアにつながる。

訪問看護につながってもらうための働きかけも重要である。地域を支える様々な人が、自分たちの地域を知ることが一歩と考え、千葉市稲毛区で稲毛研究会と称して定例会を開催している。参加者には、医療職や介護職だけでなく、就労支援担当者、訪問美容師、民生委員など多様な地域の人々が集っている。改めて、訪問看護はつながる仕事だと考えている。

3) 当事者性と補完性原理—コミュニティの観点からとらえる「つながり」（関谷昇氏）

わたくしは、実践の専門家ではないので、コミュニティの観点から「つながりの考え方」について説明できればと思う。

これまで、問題を抱えた人への接近は、ある程度の専門性をふまえた、より大きな組織から小さな単位へ、例えば国から地域、さらには個人・家族へと行われてき、それが限界を迎えているといえる。そこで、この見方を逆転させて、まずはその当事者（個人）に視線を向け、当事者を起点として何が必要かを考えることが求められているのではないかと考える、これを補完性原理という。医療やケアが専門分化し、それぞれの専門的立場に固執していることは、専門じゃないことは関係ないという目線になってしまい、その人の固有の生を考えるとどこにまで届かないという問題が生じる。例えば患者の老いや死を考えると、その人の固有の空間的なつながりと時間的なつながりを把握しないと、当事者の固有性に近づくことはできない。専門的視点からのケアだけに固執するのではなく、そこから少し抜け出すことを考えてみてはどうだろう。そのような視点がないと、ケア

において、専門職同士でつながることも、地域住民等の非専門職と広くつながることも、できないのではないだろうか考える。

2. 事例議論と質疑応答

討論の後は事例、田舎に住む母（胃がん）を、娘の主導で自身が住む都会の病院に入院させたものの完治の治療はできない状況を知り、今後の療養に悩む事例を提示した。櫻井氏は、相談者である娘の意思決定を尊重する姿勢を持ち、母と父（患者の夫）の夫婦の結びつきにも思いを馳せられるよう支援したいと回答した。山崎氏からは、地元に戻ると近隣の人々が支えとなる可能性もあり、コミュニティの持つ力が本人や家族に重要な意味を持つことがあると指摘した。さらに、都会の病院が患者を退院させるにあたって、在宅ケア提供者をインターネットの検索だけで遠隔操作で先んじて決定してしまう事例を紹介し、患者側・地元提供者側の視点が尊重されないつなげ方に疑問を呈した。

フロアーからは地域での研修会の意義や活動の経緯について質問があり、関谷氏からは行政は様々な専門職とつながりたいと考えているので、専門職は積極的に外に出ていくことが求められていると話した。山崎氏は、活動の経緯として当初は少人数でお互いを知ろうというのが目的だったが、分かり合えるとさらに地域について知りたくなり、参加者の輪が広がったと語った。櫻井氏はこれまでの経験から、地域の組織の存続、発展には、リーダーシップをとる人とそれを応援して支える人の存在が重要と述べた。

3. まとめ

看護がつながり広がっていくためには、当事者性を起点にした姿勢が重要で、本人や家族の固有の力を信じることの重要性が示唆された。そのうえで、その人の人生・生活を支えるにあたって、専門性の枠にとどまらず、他の職種や周囲の人々と自在につながっていくコミュニケーション力と行動力が求められているといえる。